

二つの顔を持つ宰相



G7の指導者か、ファシズムの継承者か？

イタリア初の女性首相、ジョルジャ・メローニは、世界で最もパワフルな女性の一人として評価される一方、そのルーツはベニート・ムッソリーニの信奉者が設立したネオファシスト政党にある。

彼女は、NATOの結束を図める現実主義者なのか？ それとも「神、祖国、家族」を掲げるイデオロギーの戦士なのか？

このプレゼンテーションでは、数々の写真とデータを通して、メローニという謎（エニグマ）の核心に迫る。彼女の矛盾に満ちたキャリアを解き明かし、その真の姿を暴き出す。

「父のいない娘」 — ガルバテッラ原風景

メローニの物語は、ローマの労働者階級地区ガルバテッラで始まる。裕福な家庭ではなかったが、母と姉の強い絆の中で育った。



彼女が1歳の時、共産主義に共感していたとされる税理士の父フランチェスコは家族を捨て、カナリア諸島へ移住。

この「不在」と「裏切り」の記憶は、彼女の政治観の根幹を形成した。「家族の崩壊が私の政治的見解に影響を与えた」と自伝で語っている。

父親は後に麻薬密売で有罪判決を受け、9年間服役。この事実は、彼女が守ろうとする「伝統的家族」の理想像と強烈なコントラストをなしている。

この原体験が、彼女を「神、祖国、家族」という保守的な価値観へと駆り立てた原動力の一つである。

炎のルーツ：ムッソリーニの墓標から

15歳で、メローニはネオファシスト政党MSIの青年組織「Fronte della Gioventù」に加入する。彼女はそこに「第二の家族」を見出した。

Fdiが現在も使用する党のシンボル「三色の炎」。これは単なるデザインではない。MSIの創設者ジョルジョ・アルミランテが考案したこのシンボルは、**ベニート・ムッソリーニの墓から燃え上がる魂の炎**を表しているとされる。

このシンボルを党のロゴから外すよう求める声に対し、メローニは一貫してこれを拒否。これは彼女が自身の政治的遺産を「ノスタルジー以上の精神」として捉えている証左である。

19歳の彼女は公然とムッソリーニを「イタリアのために尽くした優れた政治家」と称賛。彼女の思想の根源には、ファシズムに対する明確な共感が存在した。



1996年フランスのテレビインタビュー

ホビットたちの反乱：コツレ・オツピオの誓い



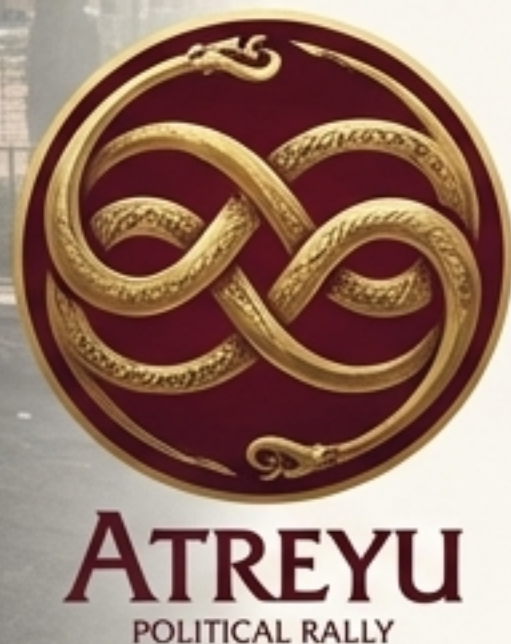
メローニの政治的「洗礼」の地は、ローマのネオファシストの拠点、コツレ・オツピオだった。そこは単なる活動拠点ではなく、思想を鍛える道場だった。

彼らはトールキンの『指輪物語』に深く傾倒。グローバリズムや近代性が破壊したとされる「英雄的倫理」や「伝統」をファンタジーの世界に見出した。

メローニは自身を、主人公を支える忠実なホビット、サム・ギャムジーに重ね合わせる。「世界を変えるのは小さな手だ」と。

彼女が主催する政治集会「Atreyu」の名は、世界を「無 (The Nothing)」から救う『はてしない物語』の英雄に由来する。彼女にとって政治とは、価値を失った現代世界(=無)との戦いなのだ。

このファンタジーへの傾倒は、彼女の政治的メッセージに神話的な深みと、善悪の二元論的な力強さを与えている。



権力への道：ベルルスコーニが見出した才能

MSIがポスト・ファシスト政党「**国民同盟 (AN)**」へと移行する中で、メローニは頭角を現す。

2008年、31歳でベルルスコーニ政権の**青年政策担当大臣**に任命され、イタリア**史上2番目に若い閣僚**となる。

この経験を通じて、彼女は過激な活動家から、国家を運営する「**インサイダー**」へと変貌を遂げる。彼女は権力の現実と、有権者にアピールするための**穏健なイメージ**の重要性を学んだ。

しかし、ANがベルルスコーニの「自由の国民 (PdL)」に吸収合併されたことを「**右派の歴史と遺産への裏切り**」と批判。彼女は主流派に安住することなく、自らの道を切り開くことを決意する。



灰色のネオファシズム：民主主義の衣をまとった権威主義



- メローニの台頭を理解する鍵は、「**灰色のネオファシズム (Gray Neofascism)**」という概念にある。
- これは、歴史学者のクラウディオ・ヴェルチェッリが提唱するもので、かつてのようなあからさまなファシズムではない。

特徴：

- **形式的民主主義の受容**：選挙や議会など、民主主義の枠組みの中で活動する。
- **美化された過去**：ファシズムの暴力性や人種法を無視し、「良いこともした」という美化された歴史認識を広める。
- **権威主義的ポピュリズム**：個人の権利よりも国家の権威を優先し、「国民の敵」を作り出して支持を集める。

メローニは「ファシズムは歴史に渡した」と公言する一方で、その遺産との感情的な絆をテコに支持を拡大する。彼女の戦略は、まさにこの「灰色」の領域で展開されている。

現実主義への転換：プーチンの友人から、ウクライナの盟友へ

“ ”2018年、プーチンの再選を祝福”

彼女はプーチンを「欧州の価値観とキリスト教的アイデンティティを守る存在」と評価し、対露制裁の解除を支持していた。

西側諸国は彼女の政権誕生に強い懸念を抱いた。



しかし、首相就任後、彼女は180度方針を転換。「アトランティズム（大西洋主義）」を掲げ、NATOの忠実な同盟国としてウクライナへの武器供与を約束。

「ウクライナの側に立つこと、それがイタリアの国益だ」。イデオロギーよりも、G7の一員としての責任と地政学的な現実を優先した。

この豹変は、彼女が権力を維持するためには、国際社会の信頼を得ることが不可欠だと理解している、**冷徹な戦略家**であることを示している。

市場が評価した「メローニノミクス」：安定がもたらした格上げ

- 「極右政権がイタリア経済を破綻させる」という就任前の予測は、完全に裏切られた。
- メローニ政権下で、イタリアの財政状況は改善。
 - 格付け引き上げ: S&Pとフィッチはイタリア国債を「BBB+」に格上げ。ムーディーズも見通しを「ポジティブ」に変更。（IIMA, 2025年）
 - フランスとの逆転: 対照的に、政局が混乱するフランスは格下げが続く。2025年9月には、イタリアの長期金利がフランスを上回る歴史的逆転が起きた。
- メローニは財政規律を重視する堅実な経済運営を行い、市場の信頼を獲得。在任期間は2011年以降の首相で最長となり、「**政治の安定**」が経済の安定をもたらすことを証明した。
- 支持率は選挙時の26%を上回る30%近辺で安定。彼女は「有能な実務家」としての評価を確立しつつある。

国債格付けの比較

	Moody's:	S&P:	Fitch:
イタリア	ポジティブ	BBB+	BBB+
フランス	ネガティブ	A+	A+

ドイツ国債とのスプレッド（10年債利回り差）



「首相公選制」は民主主義の強化か、独裁への道か

メローニ政権が推進する最大の国内改革案、それは**首相公選制**（**premierato**）の導入である。

目的：頻繁な政権交代が続くイタリアに「政治の安定」をもたらすため、国民が直接首相を選ぶ制度。勝利した連合が議席の55%を確保するボーナスも含まれる。

批判：

- 「40%程度の得票率で絶対的な権力を握ることは、少数派による支配を許す非民主的な変更だ」
- 大統領の権限を形骸化させ、権力分立を脅かす危険性も指摘されている。

この改革は、彼女の政策が「安定」を名目に、いかに権力集中へと向かう可能性があるかを示しており、イタリアの民主主義の将来を巡る深刻な論争の火種となっている。

「彼女はファシストだ。
絶対に忘れるな」

「これはアチエルボ法（ムッソリーニに権力をもたらした選挙法）の再来だ」

「妥協は民主主義の一部だ。システムをめちゃくちゃにするな」



移民政策のジレンマ：「海上封鎖」から「労働力」へ

公約 (The Promise)



選挙公約：メローニは不法移民を阻止するため「**海上封鎖**」を掲げ、「民族の入れ替え (ethnic substitution)」という過激な言葉も使った。

現実 (The Reality)



首相としての現実：労働力不足に直面するイタリア経済は移民労働力なしには成り立たない。メローニ政権はEU域外からの**正規入国枠を45万2000人へと大幅に拡大した**。

協調 (The Compromise)



EUとの協調：イタリア単独での対応は不可能と判断。EUの「共通移民・亡命パクト」を活用し、負担の分担と財政支援を確保する現実路線に転換。

彼女は、国内の右派支持者には厳しい態度を見せつつ、経済界とEUパートナーには現実的な協力姿勢を示す。これは彼女の統治スタイルの典型例である。

トランプの“通訳者”：欧米を繋ぐユニークな仲介役



バイデン政権との良好な関係

NATOを重視し、ウクライナ支援で足並みを揃えることで、ワシントンの信頼を勝ち取った。



トランプとの強固なパイプ

彼女はCPACで「トランプ大統領が我々から離れることを敵は望んでいるが、私は彼を信じている」と演説。欧州の主要首脳で唯一、トランプ氏とイデオロギー的な繋がりを持つ。



「橋渡し役」としての価値

この特異な立場により、彼女は「**トランプ氏はメローニの話なら聞く**」と評される、欧州とトランプ氏との「橋渡し役」となった。トランプ政権2期目において、彼女のこの役割はEUにとって不可欠な外交資産となる可能性が高い。

「私はジョルジャ、私は母、私はクリスチャン」:文化戦争の旗手

Passionate Editorial



国際舞台での現実主義とは裏腹に、国内では彼女は「文化戦争」の旗手であり続ける。2019年の演説「**私はジョルジャ。私は女性、私は母、私はイタリア人、私はクリスチャン**」は、彼女のアイデンティティ政治の象徴となった。

彼女の立場：

- **反LGBTQロビー**: 同性婚や同性カップルによる養子縁組に反対。「自然な家族」を擁護する。
- **反ジェンダー思想**: 学校で教えられる「ジェンダー思想」が女性のアイデンティティと母性を攻撃していると主張。
- **代理出産への反対**: 代理出産を「普遍的な犯罪」と見なす法律を推進。

これらの主張は、彼女の保守的な支持基盤を固め、欧州の他の右派ポピュリスト（ハンガリーのオルバン、スペインのVoxなど）との連携を強化するための重要な武器となっている。

結論：矛盾こそが彼女の武器である



結局のところ、ジョルジャ・メローニとは何者なのか？

彼女は「AかBか」では定義できない。
彼女はネオファシストの系譜を継ぎながら、大西洋同盟の守護者でもある。文化戦争を仕掛けながら、
市場の信頼を得る現実主義者でもある。

彼女の本質は、この「**戦略的曖昧さ (strategic ambiguity)**」にある。
彼女は、聴衆や状況に応じてペルソナを使い分ける。

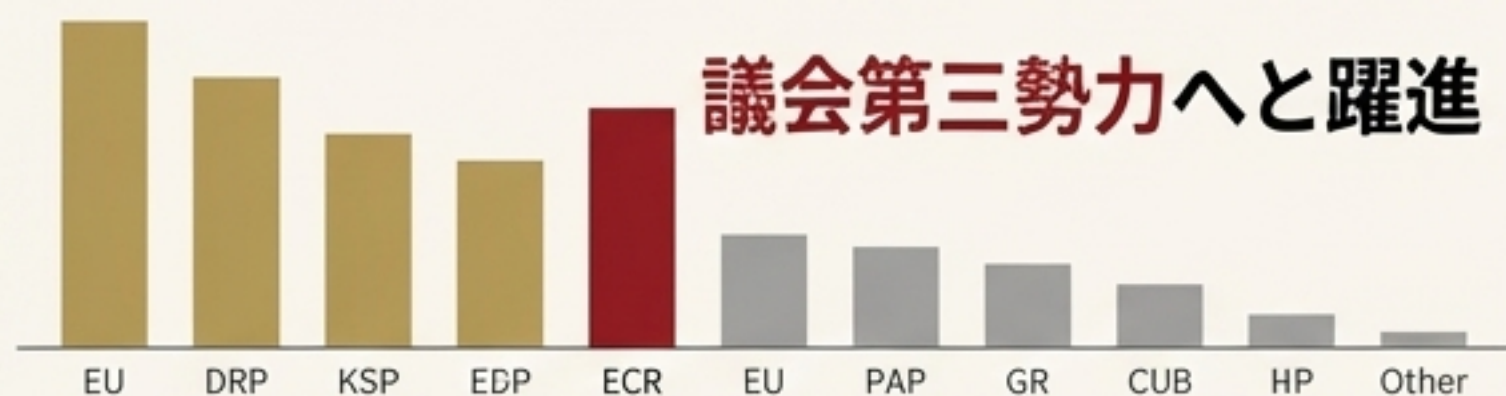
国内の支持者には：イデオロギーの戦士「ジョルジャ」。
国際社会や市場には：有能な実務家「メローニ首相」。

彼女は、自らのルーツ（炎）を消すことなく、それを権力を維持するための燃料として利用する術を心得ている。彼女の本当の顔は、これらすべての顔を巧みに操る、卓越した政治オペレーターそのものである。

次なる野望：ヨーロッパの顔を塗り替える

メローニの視線は、すでにイタリアを超え、ヨーロッパ全体に向けられている。

彼女は、EU懐疑派が集まる欧州保守改革グループ（ECR）の議長として、その影響力を着実に拡大。



フランスのルペン氏が率いる極右会派との連携も視野に入れ、EUの政策決定におけるキャスティングボートを握ろうとしている。

主流派である中道右派のフォン・デア・ライエン委員長でさえ、再任のためにはメローニの支持を無視できない。彼女は今や、ブリュッセルのパワーブローカーの一人となった。

彼女の最終目標は、EUを破壊することではない。EUを内部から、自らの価値観に沿った「主権国家の連合」へと作り変えることである。



小さな手が世界を動かす時



「世界を変えるのは、いつも小さな手だ」

—— ジョルジャ・メローニ、自らをホビットのサムになぞらえて

かつて自らを「小さな手」を持つホビットと称した女性は今、**フォーブス誌**の「**世界で最もパワフルな女性**」ランキングで第4位に選ばれた。彼女が動かす世界は、彼女が夢見た「**伝統**」と「**秩序**」に満ちた**中つ国**（Middle-earth）なのか？

それとも、我々がまだ知らない、より**暗い影**が支配する場所なのか？

確かなことは一つ。彼女の物語はまだ始まったばかりであり、その「小さな手」は、**イタリアとヨーロッパの未来**を、そして**世界のあり方**そのものを、これからも動かし続けるだろう。